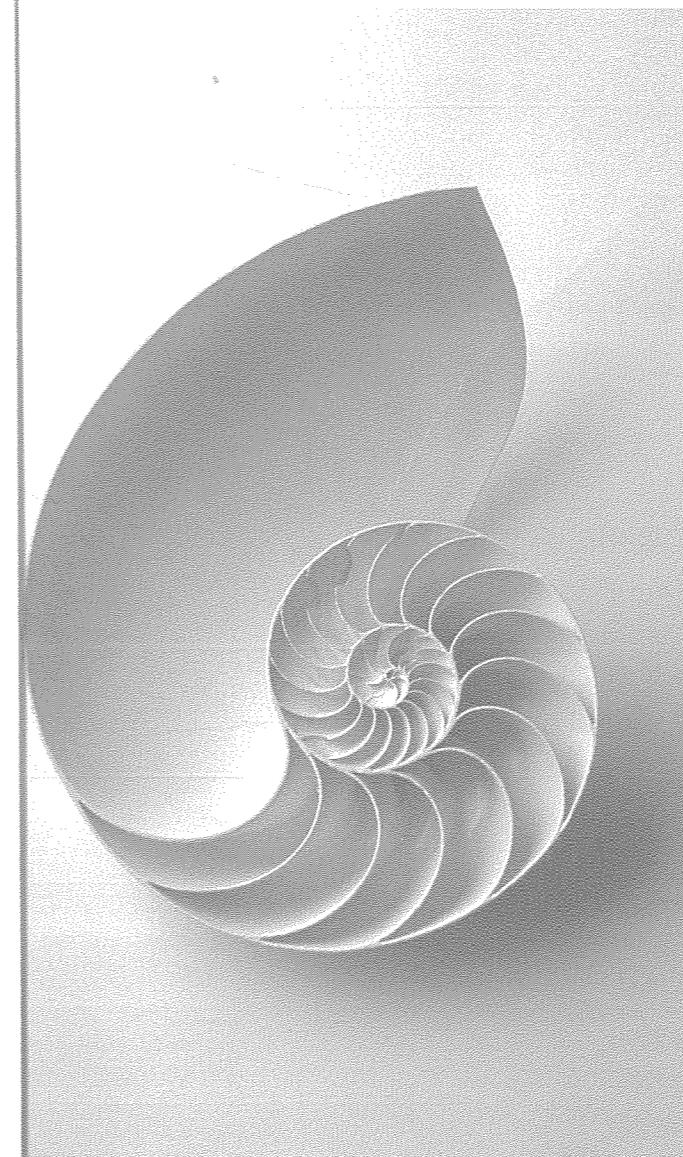


第9回  
文窓賞優秀作品集



F  
U

I  
M

——発行——

2015年10月25日

神戸大学文学部同窓会

文窓会

<http://www.kobe-u.biz/bunsokai/> (文窓会)

<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/> (神戸大学文学部)

2015年10月発行

文窓会

神戸大学文学部同窓会

## 第9回 文窓賞 学生レポートコンクール 入賞作品

### 最優秀賞

該当者なし

### 優秀賞

「机上の空論」  
赤羽 佳奈子（国文学科専修2回生）

### 佳作

「留学で得たもの、あるいは薬味の効用に関する一考察」  
筒井 瑞貴（英米文学専修4回生）

「20年分の'無駄'を生きて」  
木村 薫（フランス文学専修3回生）

◎選考会 2015年9月4日

◎選考委員

武藤 美也子（審査委員長）

増本 浩子 学部長（ドイツ文学教授）

山本 秀行 副学部長（英米文学教授）

市澤 哲 副学部長（日本史学教授）

日高 健一 花木 直彦 廣野 幸夫

西川 京子 吉田 浩次 田中 賢司

三宅 征彦 田中 康二 河島 真

### 優秀賞

## 机上の空論

赤羽 佳奈子（国文学科専修2回生）

現在、私の心中では不安が幅を利かせている。何がそんなに不安なのかと問われたら日常の些細なことを始め思い当たることはたくさんあるのだが、1番の原因となっているのは時間の流れがあまりにも速いことである。

大学生という身分となり、与えられた猶予期間。高校までに比べて自由度は極めて高く、何でもできると言っても過言ではない。今、自分が何をするかによって将来が大きく変わるべき性がある。

では、自分はその中で何をしてきたのか。

あっという間の1年間だった。専門的な勉強、一人暮らし、サークル活動にアルバイト、他にも大学生になって初めて経験したことは枚挙に遑がない。どれも自分にとっての糧になったことは確かだ。しかし、問い合わせて私の頭に真っ先に浮かんだことは1つであった。それは、とにかくたくさん本を読んだということだ。

神戸大学文学部に入学した去年、文学部生として大学在籍中の目標を「言葉を選ぶ能力を身につけ、世界をさまざまな視点から見つめられるようになること」とした。そのためにはまず、今自分がいる枠の中から出て行かなければならない。そこで私が選んだのは、言葉から世界を広げるという手段だった。言葉から世界を広げるといつても、外国語をたくさん習得するという意味ではない。外国語に関係することもあるのだが、今回私が主に注力したのは日本語である。

海外留学やボランティア活動などと比べる

と、随分小さなことではないかと思われるかもしれない。しかし、文学部での勉強や人との出会いを通じて学んだ。自分の世界の広さは、自分の知っている言葉の数に比例しているのだ。自分の気持ちを伝えたいときにそれに相応しい言葉の持ち駒がなければ、駒に合わせて気持ちを変えなければならない。雨降りの日も「天泣」「肘笠雨」など雨の名前の違いを知っているだけで、その日はただの「雨の日」ではなくなる。出世魚として有名なハマチとブリは同じ魚だが、言葉によって「ハマチ」「ブリ」という区別ができる。つまり、知っている言葉が一つ増えるだけで自分の世界はほんの少し外側へと広げられるのだ。更に、ずっと日本語話者として生きてきた私にとっては、外国語を学ぶときでさえ日本語が必要だ。外国語を通して視点を手に入れようとした場合にも日本語を知ることが大前提となってくる。そして何より、言葉は今あちこちに溢れかえっている。それを自分にとってのチャンスを取りたい。塵も積もれば山となる。たくさん広がっている言葉から少しずつ知らない世界を吸収して自分のものにしようと決め、その手段の一つとして私はとにかくたくさん本を読んだ。

ジャンルは特に拘らず、1度読んだだけでは内容が理解できないようなものから斜め読みで掘めるようなもの、純文学もあれば評論、古文など、とにかく言葉を大量に飲み込んだ。そこでは辞書的な意味を知らない言葉だけでなく、馴染みのある言葉の新たな使い方や、組み合

せによって生まれた素敵なフレーズに出会うことができた。たくさん読んでいれば、ときには右から左に流れて行ってしまうような内容の本もあるのだが、その中でもふとしたところでつい繰り返し目で迫ってしまうような言葉が隠されていることに気が付いたときの充実感は何ものにも代えがたい。この1年で私が得た言葉の数々は間違いなく自分の中で生き、生活の中で実際に使わないような言葉や言い回しも「このような表現もある」という新たな視点として自分を成長させた。

そして、本を読むことで得られたのは言葉だけではない。本を読むことで想像力が広がり、違う人生や他者について考えることができて自分の世界観を変えられる、などということは誰もが幼い頃から言われてきていることだと思うので今回は語らない。大学生になり、新たに見つけた本の魅力。それは、本がもっと実用的な意味で自分の世界を広げるものだということだ。では、「実用的な意味で」とはどういうことか。

本を読むことは内向的なことであると思われがちだ。だが、そこには内向的な側面と外向的な側面との両方がある。

まず、内向的な側面とは、ひとりになって自分と向き合うことができるところだ。インターネットやSNSが発達し、誰もが常に他者との繋がりを意識する時代となった。どこにいても、何をしていても、スマートフォンを片手にしている人が目に入る。人と話しているときでさえもこの光景は見られる。そこで私は疑問を持った。なぜ人いるときにスマートフォンを見ていることは許されるのに、本を読むことは許されない空気が作り出されるのだろうか。どちらも同じように物を持ってそれを眺めるという行為には違いない。ではどこに差異があるのか。スマートフォンはそれが目の前にいる人でなく

てもあくまで人と繋がるための道具であり、それに対して本はひとりになって自分と向き合うための道具であるからではないかと私は考えた。そして、簡単に人と繋がれる時代だからこそ、繋がることよりも格段に難しい「ひとりになること」に価値が見出せると思う。ひとりになることで自分に目を向ける時間を持つことは主体的な考え方や創造のために必要だ。これは自分の世界を深めるものだと思う。

一方で外向的な側面とは、先に述べたように他者について考えられるというところともう一つ、体験を通じることで自分の世界を広められるところである。これが「実用的な意味で」自分の世界を広げるということだ。高校までの読書は、あくまで「想像」が基本となるものであった。しかし、大学生になり、新たな土地で今まで経験したことのないような自由を享受することで、今までの読みとは感覚が少し変わった。「想像」が「体験」に変わったのだ。小説や和歌の舞台となった土地や著者の生まれ育った土地に旅をする。本の中に出でてくる美術品を見に行く。読書で気になった社会問題に関する授業を受けてみる。行動範囲が広がったことに本というきっかけが加わり、さまざまなことを実際に体験することができた1年だった。どれも本との出会いがなければ一生成し得なかつたに違いない体験だと言える。また、さまざまなお本を読んだことで、入学前よりも自分の将来への選択肢がいくつか増えた。それまでは絶対にならなければならないと思っていた職業に関しても興味が生まれ、可能性が0ではないと思い始めて以来、資格取得のための勉強を始めるところにまで至ったことには自分でも驚いている。今までただの楽しみとして読んでいたために大して意識して来なかったが、読書によって私の未来への可能性は少しづつ、確実に広がっているのだ。読書と聞くと内向的な側面に目を向けられがちだが、読書は自分の外側に対する興味か

ら為されるものだということを伝えたい。

このように説明しても、最終的には文学など机上の空論ではないかと言う人もいる。机の上でいくら世界を深め、広げようとも実用的でなければ意味がないと思われているのだ。そういった実学重視の流れから、人文系学部廃止の要求が出されたと聞き、ただただ悲しくなった。人文学系学部を卒業した方や現在も籍を置いている私たちが社会的に必要ないと言われているも同然だ、というのは考えすぎだろうか。非常にショックであり、反論させていただきたい。

昨年私は文学部生にできることは、言葉を選び、さまざまな視点から物事を捉えることで社会を質的に豊かにする手助けをすることだと述べた。今年は更に1年間学んできたことで、それに加えて新たな役割が見つかった。それは、「実学」を動かせる脳となることである。

1年間さまざまな授業を受けてきて、人文学的な社会の見方の重要さを学んだ。人間の生や心に関係するのが人文学であり、人間が生きているところには人文学があるとも言える。教養原論で学んだ物理、生物、国際関係などの自分の専修とは直接関係がないことも、専門の先生に教わる見方と文学部としての見方、両方を駆使することで学びが深まった。これは今、社会で起こっていることにも当てはめられる。医療倫理がわかりやすい例の1つである。出生前診断による中絶や脳死から浮かび上がる、どこからどこまでが生であるのかという問題には、科学と人文の両方からの見解が必要だ。ほかにも開発と人の命の問題や人間と自然の共生、自由な経済活動と経済格差の是正など、実学とされていることと人文とがそれぞれの視点から考えなければならない問題は社会に溢れている。実学を一部の利益や利便性だけでなく、いかにしてより多くの人のために使えるかを考えるのは

人文の役目ではないだろうか。そして、机上の空論に中身を与えてくれるのが実学だ。イメージトレーニングと素振りがどちらもスポーツの上達に必要なように、どちらか片方が欠けたらその解決策は偏ったものになってしまう。あくまで双方と一緒に問題に取り組むことが重要なのだ。だから、私は人文を廃止してしまった世の中でなど生きてゆきたくはない。人文がこの先もなくならずにはじまると残るように人文の価値を伝えたい。

今回このレポートを書くにあたり、あっという間に過ぎ去ってしまったと思っていた1年間で学んだことや蓄積された想いが、自分の考えていましたよりもはるかに多いことに気が付かされた。だが、書くべきことはたくさんあるのに吸収してきたはずの言葉は頭の中で散らかっていて見つけ出せない。私はかなり苦しんだ。10000字を自分の中に入れるより100字を外に出す方が難しい。まだまだ自分の得てきた言葉は選べるように整頓された状態ではなく、視点も十分に多くなったとは言えない。目標達成への道のりは遙か遠くだ。ただ、このレポートを書くことによってわずかながらも自分が進歩してきたことを確認でき、さらさらと流れる時間の中でもそんなに焦らなくてもよいということを知ることができた。

今年で20歳という節目の年を迎える。社会の中での自分の立ち位置を考えつつ、机の上やもっと遠くの世界から聞こえてくる「精進せよ」という言葉に応えられるよう、倦まず弛まず龜の一歩を進めたい。

佳 作

## 留学で得たもの、あるいは薬味の効用に関する一考察

筒井 瑞貴（英米文学専修4回生）

昨年、学部の交換留学制度を利用して、一学期間イギリスのバーミンガム大学で学ぶ機会を頂いた。およそ三ヶ月と短い期間ではあったが、語学力の向上もさることながら、国籍も母語も異なる多くの友人を得ることができたし、何よりも英文学の本場に身を置いてみて初めて見えてくることもあり、まことに有意義な経験であったと言える。

とはいっても現地の授業についていくには想像を絶する努力を要した。生まれた時から英語を母国語として用いてきたイギリス人の学生たちに混ざって、ジェフリー・チョーサーだの、サー・トマス・ワイアットだの、シェイクスピアを学ぶわけだから、これが楽だと言う方がおかしい。したがって、三ヶ月間の多くは、ひたすら膨大な量のリーディングを含む予習や復習に費やされ、学期の途中と末には英文でのレポートの作成に追われることとなった。大教室で行われる講義は、一度聴いただけではまるで理解できず、録音したもの自室で繰り返し聴き直さなければならなかったし、少人数でのディスカッション形式での授業も、食らい付いていくためには入念な準備が必要であった。

そんな具合に、朝から晩まで文学にどっぷり浸かっていると、いきおい自分は果たして何のためにその学問を学んでいるのか、自問せざるをえない。現代の日本に生きるわれわれが、エリザベス朝の十四行詩の韻律を分析したり、『ダロウェイ夫人』や『ジキル博士とハイド氏』を原文で精読し、ハロルド・ピントーやトム・ストッパードの戯曲を考察する目的とはいっていい何なのであろうか？——その意味で、三ヶ月の留学とは自分にとって、自らの専門分野と真摯

に向かい、その意義を不斷に問い合わせるものであったように思う。人間にとて文学とは何か。留学を終えて大学四年間の集大成たる卒業論文に取り掛からんとする今、自分の中では確固とした、とまでは言えぬまでも、ある程度はっきりとした答えを、曲がりなりにも導き出したつもりである。しかしながら、その結論に私を導くきっかけとなったのは、皮肉なことに、文学それ自体のテクストでも講義でもなく、チャーハンと葱であった。

話は変わるが、恥ずかしながら私はこれまでずっと実家暮らしだったので、一人暮らしの経験がまるでなかった。そういう次第で、私に作られる料理といえば、渡航前に慌ててレシピを頭の中に叩きこんで体得したチャーハンくらいのものであった。現地に着いた後も、勉強に追われて新たな料理のレパートリーを覚える暇はなかった。その結果、四半年の間、来る日も来る日も夕食には付け焼刃の知識でチャーハンを調理し、食べ続けることを余儀なくされた。付け焼刃とはよく言ったものだが、私の場合、寮に備え付けられたコンロの火力が著しく脆弱だったので、そもそも初めからいかなる刀の鍛錬にも不向きであったと認めざるをえない。

さて、イギリスで売られている米は明らかに日本のそれとは異なる。形状も、歯ごたえも、味もまるで違う。水加減が難しく、少し誤つただけで硬すぎるか、さもなくば柔らかすぎになってしまうのだ。おまけに先にも述べたように、コンロの火力が弱いために、チャーハンの生命線となる、あのパラパラとした食感が、どうやっても再現できないのである。結果として、私がかの地で作り上げた料理は、米に油をかけて炒めただけの代物に過ぎず、到底チャーハン

とは呼べないものであった。

沼地のように湿った、味気ないことこの上なしのチャーハンを来る日も来る日も食べていると、当然のことながら、何かしらの工夫をしてその苦役をやり過ごしたくなる。レモン汁をふりかけたり、塩コショウを大量にまぶしたりと、貧弱な知恵を絞って試行錯誤を繰り返すうちに、私は徐々にずぶずぶとチャーハンの深みにはまっていった。何か他に良い方策はないものかと、食材を探し回る日々が続いた。そこで偶然目に留まったのが、平生より私が軽蔑、というより軽視してやまなかつた葱であった。

葱について、私は語るべき知識をほとんど持たない。日本ではいつも食べていたチャーハンに葱が紛れ込んでいたことすらも忘れていたほどである。ラーメンなどによく山盛りの葱が載せられていることがあるが、何だか装飾過剰なパロック様式の建築物でも見せられているようで、食べる前からげんなりとしたものである。葱とは無用の長物、賞味の妨げになりこそされ、貢献することなどよもやあるまい——私はそのようなわれなき偏見をこれまで抱いていた。ところがその日の私は、その安さにつられてか、それとも多少投げやりな気持ちになっていたのか、その辺は今となっては定かならねども、ものは試しとばかりに、何の気なしにユリ科の多年草を購入し、輪切りにしたうえで自作のチャーハンに投入し、恐る恐る口に入れてみた。

その瞬間、私は二十二年間もの長きにわたって葱を軽んじてきた己の軽率さと浅薄さをいたく恥じ入るとともに、葱に対する考え方を根本的に改める次第となった。

油で炒めた米と野菜と豚肉の間に絶妙に混ざり合った葱は、すべての具を調和させ、なおかつ個々の食材の長所を最大限に引き出すことに成功していた。芳しい香りが鼻孔の奥で優しく広がっていました。味覚を司るすべての神経は恍

惚とし、口の中は深い余韻に包み込まれた。咀嚼と嚥下を辛うじて免れた僅かばかりの葱は、私にもたらした刹那の感動を永遠たらしめるべく、興奮覚めやらぬ前歯の裏に張り付いて、いじらしくもその名残をとどめようとする。一握の葱が、こんなにも料理を豊かにするものかと、私は蒙が啓かれる思いだった。

ずいぶん前置きが長くなってしまったが、誤解を恐れずにいえば、思うに私が学んでいる文学もまた、ある種の葱なのであろう。葱がなくとも、ほとんどの人は困ることがない。料理を葱なしに成立させることは実にたやすい。しかし、ふとした時に気が付くことがあるはずだ。その芳醇な香気に。優しく纖細、それでいて食べる側に一切の妥協を許さぬ、奥深い嗜みごたえに。たしかに、文学が人間の主食たりえたことはなかつたし、おそらくはこれからもそうなることはないであろう。だが、ともすれば無味乾燥な日常に彩りと味わいを添え、ほんの少しだけ豊かなものにしてくれるものとして、その存在は決して無下にすることはできないと、私は思う。

例えば、チャールズ・ディケンズの作品を読めば誰もが文学というものが内包する無辺の大に気付かされることであろう。逆境と苦難の連続にも負けずに立ち向かうオリバー・ツイスティやデイヴィッド・コパフィールドに勇気づけられ、サム・ウェラーの機知と、ピクニック氏の滑稽な言動に温かい笑いを誘われ、シドニー・カートンの高潔な決断に拍手を送り、強欲で冷酷なスクルージの改心に我が身を振り返って襟を正す……これほどまでにわれわれの感情に訴えかけ、人間を眞の意味で人間たらしめる営為が、文学をおいて他に存在しようか。そして、こうした人間性の本質に肉薄する学問であるところの文学もまた、他の分野に劣らず有意義にして実り多き研究の対象と呼べるので

はないだろうか。

昨今の政府の教育における方針は、理系を中心とするいわゆる「実学」に偏重しつつあり、文学に代表される人文学系統の学問は「虚学」といわれなき誇りを受け、無残にも駆逐されんとしている。無用なるものを安易に断ずるのではなく、そこに秘められた真価を見出し、深く掘り下げていくための可能性と機会とを十全に保証し支援していくことこそが、世界を牽引していく器を持った国家の真になすべき施策であろう。

端的に言えば、国家が目下調理せんといっているのは、葱を欠いたチャーハンである。なるほど、そのレシピに無駄はないよもしれぬが、世人は口に入れてみて初めてその味のいかに空疎たるかをさまざまと思いつくるであろう。人文学を修める我が身としては、今こそ声高に訴えた。葱を侮ることなれど、と。あるいは、私は一粒の米を愛する以上に、一片の薬味を愛する、と。私は大学で四年間文学を学んできたことを恥じるつもりはないし、これからもその事実に自負と誇りをもっていきたい。葱がチャーハンにとってそうであるように、文学もまた、社会にいくばくかの風味と色合いとを付与するものであることを、そしてそれゆえにかけがえのないものであることを、今や私は信じて疑わない。

以上が私が留学を経ての所感を簡潔にまとめたところのものである。三ヶ月も海外において得た教訓が、薬味の大切さというのは、いささか食い足りない感のあることは否めないが、これは無いものねだりというものであろう。さすがに葱だけでお腹が膨れるはずもないのだから。

## 佳 作

# 20年分の‘無駄’を生きて

木村

薰（フランス文学専修3回生）

「そんな時間の無駄でしょう？」

この間もまたそういわれた。これまでにも何度もそんな視線を背に感じたことだろう。特にひとつのことにつき精を出す人からは私の複数の稽古事や部活は無益な要素に映ってしまうようだ。昔から、私はマイペースで、他の人にはなかなか理解されないところがある。20年この方、ゆっくりとした田舎者らしい自分のペースを守り通してきたし、親もそれをよく分かっており自由にさせておいてくれた。大学に入るとき、親のいる故郷を離れ、別段守ってくれるものない地に赴いて、新しい環境・新しい人間関係の中に身を置いた私は様々に色を変えた。

環境はすこぶるよい。私はどこにいこうと楽しく生きていく自信はあるけれど、これ以上ないくらい友人にも先生にも恵まれた。誰にも譲りたくないほどだ。過去の自分にさえ譲りたくない。私がいま専門に学んでいるのはフランス文学だが、ここでの学びの対象は文学に留まらない。フランス文学を読み、存在の揺らぎに思いを馳せる。演習の授業で扱った、作家パスカル・キニャール。去年までは名前すら知らなかつた作家だが、非常に興味深く原文できちんと読み解ける日が来るのが待ち遠しい。どうも私は作品に描かれるへんてこな表現に魅せられるようだ。そこに見出した狂気を私の中に大事にしまっておきたいとも思うが、人に伝えたくてたまらなくなる。パスカル・キニャール、その作品との出会いはかけがえのないものに思われる。彼はアマチュアチェリストとしても名を馳せる実に多才な人物だ。

100年という時間は私が想像するに長すぎる。どんな人の生きた、どんな時代だったのだろうか。今年2015年は神戸大学交響楽団の100周

年の年もある。

大学のオーケストラに所属して高校の時に心機一転習い始めたチェロを大学でも続けていく。奇しくもこの年、私は楽団の100年目のチーフマネージャーを務めることになった。自分で願ってのことではなかった。というのも、私は基本的に目立つことに興味がない上に、ましてや人の上に立つなんてとんでもないと思う質である。立候補者の出なかった状態で投票が行われそれぞれの役割が決まったときから、私は何をしているのか、どうしてこんなことをすることになったのかと考えるようになっていた。学生団体として何もかも自分たちで考えて行動することを強いられる。ほとんどまっさらな状態から演奏会のために必要なことを決めていく。記念すべき年なのだから何か特別なことをするのだと、先輩方が考案された遠征公演を私たちの学年が運営することになった。1月に引き継いでから幾度となく会議を重ね、なんとかここまでこぎつけた。うまくいかないことなんて多々あった。投げ出したくなることも。やめるのは簡単だ。代わりはいくらでもいて、空きがでたらどうにかそこを埋めるだけのだろう。迷惑はかかるけれど、そんなことは大した問題ではない。やめることによって得られる自由さと、同時に訪れるであろうひとつの関係の欠如とを天秤にかけば答えは明白であった。私にとって今ある環境が一番大事なのだ。

公演1か月前にもなると、なんで私が、などという卑怯な考えはもう起こさなくなつた。逃げの姿勢は醜いものだし、その状態ではなにもことを起こせない。そして、とうとうこの夏5月と6月に本番を迎えた。開場する前からすでに私たちのステージは始まっていた。そそっか

しいところのある私は、自分の演奏10分前までロビーを見回った。一瞬で着替えを済ませて舞台にたつと、そこはもう別世界。あまり緊張はしなかった。音にまみれる感覚が快かったし、その一瞬一瞬変化をおこしていく音楽の生の魅力を体感できる空間だった。うまくいったかどうかは、聞きに来てくれたお客様の判断にゆだねたいと思う。自己満足で終わってしまう演奏会ほど残念なものはないと思っているので。

二回生の秋から約一年間、オックスフォードの留学生のチューターをした。部活にバイトに教習に勉強に、自分のことで忙しいのだからやめとけばいいなんてちっとも思わなかった。忙しいは言い訳にできない。いつだってチャンスは転がっているように思われるし、知っているのなら尚更それを見逃したくなどない。これまでに気づかないがために見逃してきた沢山のチャンスを私は知らない今までいるのかもしれない。チャンスは向こうからやってくるものばかりではないのだから、せめてもの予防線は私の手が届く範囲でどこまでも張り巡らしておきたいのだ。このチューターの仕事だって同じである。私でなくとも代わりはごまんといただろう。それでも、新しい関係を築くことができたに違いないし、出会いはかけがえのないものであった。私は彼のハブ空港となって、私の人間関係の輪の中に誘った。こうすることによって、たとえ代わりのきく仕事であっても、私にしかできることをした。今や、彼は私のよき友人で、イギリスに帰って行ってしまうのが本当に残念でならない。

この一年間で、このような貴重な経験を経て、私は「無駄」は決して無駄ではないと確信した。

いまや、中学はプレ高校、高校はプレ大学と化して、大学はプレ社会としての役割を強めようとしている。その中で文学部は、いまの世の中、必要ないといわれることもあり、文学を

研究する意味も問われ出しているように思われる。

ふと、ゴーギャンの絵、*D'où venons-nous? Que sommes-nous? Où allons-nous?*（我々はどこからきたのか、我々は何者か、我々はどこに行くのか。）を思い出す。一体何のために、私はここにいて、いったい何をしようというのか。そして、そこには何か意味があるのか。私の周辺でもすでにインターンシップや公務員試験に備えてみな動き出している今日この頃、私の中でひょっこり矛盾が顔を覗かせる。

高校までは人が敷いてくれたレールの上を走っているだけでよかったのに、もうそのレールも誰も敷いてはくれない。道筋を示してくれるのは環境とその中を生きる自分だけになってしまった。私がこの学部にいることができるのも、あと1年と半年。どう生きるかは、すべて私次第。

ある人に、これから先もはや文学は廃れるはないのだ、と言われた。世の流れを変える力は私たちにはないのだ、と。本当にそうなのだろうか。私にとって、本は小さいころから親しんできたたくさんの道だった。本のもつ香り、紙の滑らかさ、めくるときの肌触り。それらは、道に咲く花の薫り、靴の裏に感じるでこぼこ、その道を歩くときの感覚だった。その反動か、電子書籍は嫌いだ。便利さだけに特化してしまえば、温もりはみな消えていく。勿論便利なものを利用しない手はないけれど、この世はどうも味気なく、冷えてきてしまっているように思われてならない。いまや文学も無駄なのか。

The virtue of prosperity is temperance, the virtue of adversity is fortitude. 順境の美德は節制、逆境の美德は不屈の精神。ベーコンの言葉だ。高校の頃に出会ってからいつも忘れずにそばに置いているものの一つである。そのときそのときの状況に一喜一憂していないで、うまくいかない時こそ、搖るがないことが大事なのだ。

今年5月、所属するオーケストラで東京に初めての遠征公演をした際、地震が起った。本番前日リハーサルの最中だった。動搖。揺れは私の中まで伝わった。震度は4. そんな場合であっても耐えなくてはならない。その日は練習をすぐ切り上げ次の日に備えることにした。音をたててくすぶり続ける不安を胸に抱えながらも本番ではなんとか無事に演奏し終えることができた。忍耐が練達を生み、練達は希望を生むのだ。不安分子は至るところ、この空気中に混ざっている。そんなものを気にしてばかりではなにも事は起こせないし、起こらない。たとえ、うまくいかないことがあったとしても、ベクトルをそのまま向け続けることでいつか突破することができる日が来るのだと私は信じている。

きれいな色とりどりの花をつけるもの、淡い洗練された姿たちをしたもの、薰り高いもの、空に向かって高くたかくそびえるもの、辺り一面に青々と生い茂るもの。いろんな種類がある。そのうちのどれかなんて、私たち自身に今すぐわかるはずもない。自分で自分を見つめるのはどれほど恐ろしいことかと思う。

「そんな時間の無駄でしょう？」

否。そんなことは決してない。時間の無駄というのは、何に対するの無駄なのか。就職活動か、それとも目先に迫るテストだろうか。それとも長い人生においてなのか。もちろんそれらが大切にすべきものであるのは言うまでもないことである。それでも、これらの「無駄」はみな、その先につづいていくであろう私のこれからを生きていくための投資であり財産になると思うのである。いわば、肥料だ。たとえ他の人に目には無駄に移ろうとも、私は回り道を恐れない。「回り道」こそ、私にとっての大学生活の意義である。いろんな道を散歩してまわって、いろいろなことを経験することができる。それは、人工的にバイパスを通した舗装された大き

な一本道より、ずっと趣がある。そんな道を選べるとは、私の学部はなんて豊かなのだろう。いつもバス通りすぎる道を散歩してみるのもとても愉快なことである。小さな花にも目がいくし、人々の息遣い、小鳥のさえずり、蝉の声、それらが新鮮な状態でまっすぐ私に飛び込んでくる。樂なのはバスだけれど、出会いと発見があるのは散歩道だ。

もしもここが職業学校であるなら私は大学に通っていたかったのは確かだ。これがただのモラトリアムに過ぎないといわれようと、折り返し地点を超えた現在、以前にもまして大学生として大学で学んでいる「今」という時間を大事にしたいと思う。いつの日か綺麗な花が咲くよう。